

やはり俺のToLOVEるな
日常はまちがっている。

スキート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

腐り目の少年、比企谷八幡はクサリメ星出身の宇宙人だ。

そんな彼は結城梨斗と出会い、結城美柑と出会い、西連寺春菜と出会い――

そんな彼の日常にある日、舞い降りた少女、ララ・サタリン・デビルーク。

これをきっかけに比企谷八幡や結城梨斗のとらぶるな毎日が始まりを告げる――

不定期更新

目次

トラブル1	腐り目の少年	1
トラブル2	銀河からの使い	12
トラブル3	二人の距離	19
トラブル4	爆発直前の怒り	27
トラブル5	初めてのデート	34
トラブル6	止まらないドキドキ	42
トラブル7	赤髪のおさげの少女	51
トラブル8	臨海学校へ	61
トラブル9	肝だめしのジंकウス	67

トラブル1 腐り目の少年

「八兄起きてっ」

「……ん」

ある少女に揺さぶられ、俺はゆっくりと目を開けた。

「……美柑か。おはよう」

「んっ、おはよ」

この娘は美柑、俺の幼馴染である。

ここは結城家。もちろんこの家には結城の姓の人たちが住んでいるのだが、俺と俺の妹の小町の姓は比企谷なのでこの家族というわけではない。

まあ、結構昔からお世話になっているのでほぼ家族みたいなものなのだが……。

「八幡おはよー」

「お兄ちゃんおはよ」

俺の部屋から一回に降りると2人の声が聞こえる。

上からリトと小町だ。

こいつ、結城リトは先程紹介した美柑の兄で、俺と同じ年の幼馴染だ。そして小町は俺の妹だ。

俺たち4人は仲良く一つのテーブルを囲い、美柑の作った朝食をおいしくいただき、学校に向かった。

。

「比企谷くん、結城くん、おはよう」

「うっす」

「お、おはよう！」

今俺たちに挨拶して来たのは西連寺春菜、リトの想い人だ。

「今日も春菜ちゃん可愛いな〜」

「……毎回言ってるんなそれ」

「そ、そういう八幡には好きな子とかいないのかよ!!？」

「いねーよ」

—×—×—×—

休み時間

「今日 春菜ちゃんに告白する!!?」

……また始まったよ。リトがこういうのは珍しい訳じゃない。

だが結局、ヘタレな中身と不幸が重なり、告白出来ずじまいにいる。

俺は正直この告白を応援出来ない。

西連寺がリトのことを好きじゃないのを知っているから、あと、もう一つ、西連寺が俺のことを好きだから。

はあ? 何言ってるのこいつ? と思うかも知れんがこれは勘違いではない。

中学時代、西連寺が俺とリトが一緒にいるところをよく見ていた。あの頃の俺は西連寺はリトを見てるんだと思っていた。

だが、違った俺が1人にいるとき、西連寺は俺を見ていた。

実際にリトより俺に話しかけてくるし。

え? 何でそこまで知ってるかって? 先に言っておくがストーカーではない。俺の趣味が人間観察だからだ。

それはさておき、リトはちやつかりと告白する決意を決め、放課後に告白すると言ってきた。

……別に俺にこいつの恋を止められる理由なんてないし、本当に好きだというのなら

。

告白した方がいいとは思うのだがな……。

結城家

「お帰りー、八兄」

「お帰り、お兄ちゃん」

「ただいま」

俺が帰つてくると2人揃ってソファーに座りダラダラとアイスを食べていた。アイヌ食べすぎだよ！ 1日何本食ってんの！

「八兄、リトは？」

変なことを考えていると美柑が話しかけてくる。

「……なんか用事があるってよ」

俺は答えを渋っておく。

リトも美柑に言つてないってことは知られたくないことだと俺は判断し、秘密にしといてやる。というかこういう恋愛ごとを妹に言うのは恥ずかしいだろうし。

「晩飯になったら呼んでくれ」

そう言つて俺は2階にある《H A C H I M A N》と書かれた表札の部屋に入る。

—X—X—X—

晩飯を食い終わり、ベッドでだらだらしていた時に1階から「ギャ——!!?」とリトの悲鳴が聞こえてきた。

「何だ!??」 と思い俺は下に降りる。

そして慌てていたのは俺だけではなく美柑と小町も慌てた様子でリトのいる風呂場に向かう。

「何だ（どーしたの）（大丈夫）リト（リト兄）!??」

俺らが慌ててリトの元に向かう。

するとリトがフラフラとした様子で出てくる。

「フ……フロ場に……」

「ハ、ハハ、ハダカの女が……」

意味わかんないことを言っ出て来たリトの言葉を信じ、風呂場を覗くがリトのいうハダカの女はいなかった。

—×—×—×—

その後、俺もリトも部屋に戻ったのだが、すごく騒がしくしていて、誰かとの話し声が聞こえてきていた。

……何をしているのやら。

。

次の日

「八幡、どうしよう〜」

何故か西連寺がいる前で誰かに告白してしまったらしいこのバカは、ずっと俺にネチネチと愚痴ってきていた。

「ちがああああう!!?」

ひやう!? え? 何? てかあぶねー変な声出るところだったぜ……

「そんなリトの声に国語教師の骨川先生がびくつとしてしまったではないか! リト! 先生もう歳なんだぞ! 俺の方が失礼だな……」

昼休み

「……あれ?」

「どうした、リト?」

「弁当がねえ」

「購買行ってこい」

「酷っ!? 対応酷っ!?」

そんなことをしているとクラスメイトの猿山がリトを呼ぶ。

「リトツ!!?」

「ど……どーゆう事だよ おい!!?」

「スッゲーかわいー 女のコがおめーの事探してんぞ!!?」

そーういい俺とリトは廊下に向かう。

「ララツ!!?」 お前何でこんなところに!!?」

まだ喋り続けるリトをかためにあることを思い出す。

ララ、ララというのはデビルーク星第一王女の名前の筈だ。

本名、ララ・サタリン・デビルーク。

俺が最も憎んでいる奴の娘だろう。俺の住んでいた星はこいつの親父に破壊された。

どうにか生き残った俺は小町と一緒に地球に逃げて来たのだ。

俺はあの日に誓った。

ララの親父、ギド・ルシオン・デビルークに必ず復讐すると。そう、誓ったのだ。

……んで、その後結局ララは結城家に住むことになっていた。

トラブル2 銀河からの使い

「どうしたの？リト」

「いきなり『外で話がある!!?』なんて改まっちゃって」

「早く帰ってゲームの続きやろーよ」

この声の主はララ・サタリン・デビルーク。

そのララが話しかけていているララの目線の先にいる少年、結城リトである。

俺は今この二人の後をつけた。

気になったのは何でリトがララと一緒にいる羽目になったのか、ということだ。

ララに告白してしまったリトは誤解を解くためにララを外へ呼んだらしい。

リトが必死に説明しているところにある男の声が響く。

「ララ様っ」

「ザステイン!!?」

現れた男の名はどうやらザステインというらしい。

リトは「うわっ！また変なの来た!!?」と驚いた。

ザステインは地球に来てからの苦勞をいきなり語り出した。

まあ勿論こいつが地球に来た目的はララを連れ戻すということだった。

「ベーーーだ！私帰らないもんね」

「帰れない理由が出来たんだから!!？」

「…帰れない理由とは？」

ララの返事にザステインは眉をひそめる。

「私！ここにいるリトの事好きになったの!!？」

「ぶっ」

はっ！いかん、笑ってしまった。

「何者だ!!？」

バレた。

「ど、どーも」

「八幡!？」

「誰?！」

リトは驚き、ララは不思議な顔をしている。実は俺はララと会っていない。

「そのこの男の知り合いか？」

ザステインはリトに指を指す。

「そっす」

「話はそれたがララ様そうはいきません」

「このザステイン、デビルーク王の命により、ララ様を連れ戻しに来た身」

「得体の知れぬ地球人とララ様の結婚を簡単に認めて帰つては王に合わせる顔がない」

ザステインの言葉にララは「じゃあどーすればいいの？」と聞く。

「お下がりでくださいララ様」

素晴らしいザステインは腰に下げている剣に手をかける。

ザステインが剣を振りかざし、リトが吹き飛ぶ。

こりやリトがあぶなーな。

「私が見極めましょう」

「その者がララ様にふさわしいか否か」

「キアリトとやら」

「実戦で貴様の實力を見せてもらおう!!? いぎ勝負ツ!!?」

「ちよ、待て待て待て、何でそーなるんだよーっつ!!?」

車にリトが隠れる。

俺はそのリトの前に立つ。

今更止まらなくなったザステインは驚いた顔をしながら突っ込んでくる。

キンッ!

何かがぶつかり合った音が周りに響く。

「貴様何だその剣は？」

「腐り剣？ かな」

「何で？ が付いているのだ」

そんな俺とザステインの会話に驚いているリトが入ってくる。

「お、おい八幡！ どーゆう事だよ！！？」

「ずっと黙っててすまん、リト」

そして俺は一番伝えなくなかった事をリトに伝えるために口を開く。

「俺、実は宇宙人なんだ」

その言葉を聞いたリトは「は？」と固まる。

「まさか貴様、その目は、10年前我々デビルーク星が滅ぼしたクサリメ星の生き残り…

か？」

「ご名答」

「すまん、リト、俺、この件が終わったらお前ちん家でてくから、小町は見逃してやってくれ」

「そ、そんなこと…」

「さあザステイン、まだやるか？」

俺の言葉に「勿論」とザステインが頷く。

「はあ!!？」

ザステインが全力で突っ込んでくる。

「貴様らクサリメ星人の持つ力を恐れた我々側の人間が王への指示を仰ぎ、デビルーク王直々に星を滅ぼした!!？」

そんな言葉を聞きながら俺はザステインの振るう剣を避ける。

「真面目にやれ!!？」

そしてザステインは剣を勢いよく振るった。俺は先程作った腐り剣で防ぐ。

「なんの!」

ザステインのふるった剣は俺には届かない。ザステインが戸惑いながら剣を確認すると刀身がなくなっている。

「…何をした？」

「腐らせた」

ザステインの質問に俺はあっけからんと答える。

「…私の負けだ。貴様、名前は？」

「比企谷八幡だ」

俺の言葉にザステインは「そうか、覚えておく」という。

「また話がそれたが言わせてもらおう」

「俺はずっと隠れている男と戦っていない！」

「ザステイン！」

「何ですか？ ララ様」

「デビルークNo.1の剣士っていわれてるザステインにリトが勝てるわけないじゃん」

ララの言葉にザステインは必死に言葉を絞り出す。

「しかしララ様!!？」

「ララ様と結婚するという事はデビルーク王家の後継者としてデビルーク王が治める数多の星々の頂点に立つという事!!？」

「軟弱な者につとまるものではありません!!？」

「だから王は銀河中から有志をつのってララ様とのお見合いをー」

ザステインの言葉にララが反論する。

「それがイヤだつて言ってるの!!？」

「どーせパパは私より後継者の方が大切なんだよ!!？」

「いーえそんな事はありません」「いー加減にしろ!!？」

ララとザステインの言い合いにリトが口を挟む。

「デビルーク星の後継者とか…、お見合いとか…、どーでもいいんだよんな事。普通の生

活させろよ!!? もうこれ以上好きでもねーヤツと結婚とか…、だから…もう帰つてくれ!!? 自由にさせろよ!!?」

リト…そんなに自由になりたかったのか…(同情の目)。だが酷いことを言われたはずのララは逆にときめいていた。

リトが必死に言い訳をしている間に今の状況を説明しよう。

リト↓自由になりたいから言った

ララ↓自由にしてあげろよとリトがザステインに言ったと勘違い

そしていつの間にかララが結婚したいとか言ってるし、ザステインも諦めて帰つてたし…。

俺も帰るか…。

…何か忘れた気がするがまあいいか。

トラブル3 二人の距離

隣の部屋の騒音で俺は目を覚ます。俺が部屋を出ると…。

「お邪魔しました」といいリトの部屋から出てきた美柑とあった。

「おはよー、八兄」

「おはよう」

「ご飯出来てるよー」

俺と美柑は何か騒がしいリトの部屋を後にし、下に降りた。

—×—×—×—

俺は今日、日直なのでリトよりも早く家を出た。

教室に着き、黒板を見てみると…

日直

西一比

連一谷

寺一谷

と書かれていた。くっ！リトに申し訳なさすぎる。
そう考えていると西連寺に見られてる気がした。

—×—×—×—

放課後

絶賛俺は西連寺と黒板消し中である。隣に西連寺がいるが勿論会話は無し。特に仲がいいわけではないので必要最低限の会話しかない。べ、別に人と会話ができないわけじゃないんだからねっ!!? ∴結論、俺がやってもキモいだけだった。

そのまま放課後まで何も話さないまま日直の仕事が進んだ。そして、日直の仕事をしている途中、西連寺が話しかけてくる。

「比企谷くんってさ…、中学のころ虐められてたよね…」

「そ、そうだがどうした?」

痛いところをついてくる西連寺。

「結城くんが花壇荒らしたって濡れ衣着させられた時にさ、比企谷くんは自分がやつ

たつて言ったよね？」

「ああ」

「私さ、その時、胸がとつても苦しかった。何でこの人は自分を犠牲にしてまで人を助ける勇氣があるんだろうつて……」

俺はそれつきり黙ってしまふ。

「それはさ、比企谷くんの優しさだと思ふよ……」

「人が普通できないことやつてのけちやう比企谷くんのことを私はずっと見てた。その時、私は比企谷くんのことを好……」

ポフンツと顔が一気に赤くなる。

「き、聞いてた？」

「い、いや、何も聞いてないでしゅ」

か、嘸んだ。なんてこつた。

「ふ、ふ、ふ、ふ」

俺が嘸んだことが面白かったのか西連寺は笑う。多分俺は今、耳も真つ赤だろう。

「早く、仕事終わらせちやおつか」

「ああ、そうだな」

—×—×—×—

仕事が終わって俺らは下校する。まあ案外会話が繋がらないものですなあ。

ポタツ、ポタツ

「ん？ 雨か？」

「そうみたいだね」

すると雨は一気に勢いを増し、大雨になる。

「走るぞ、西連寺！リトの家の方がすぐそこだから行くぞ！」

「う、うん！」

結城家に着くと俺は西連寺を家に上げる。

「ただいまー、はあはあ」

「お、お邪魔します、はあはあ」

「おかえり、八幡…って西連寺!？」

「家に上げていいよな？」

「も、勿論！」

「西連寺、風呂に入ってこい」

西連寺を家に上げると俺は西連寺を風呂に促す。

「へっ!?でも比企谷くんが先で…」

「服透けてる…」

「そういう俺は西連寺から目をそらす。あとリトも。」

西連寺は「ひゃあっ!」と声を出し、お風呂場に駆け込む。

「なあ、八幡、どういふことだ」

「ドス黒いオーラを出したリトがいつの間にか立っていた。」

「い、いや、日直と一緒に、帰り一緒に帰ってたら雨が降ってきて、そのまま家に…」

「だがリトが放っていたドス黒いオーラが光のオーラに変わる。」

「ナイスだっ!」

—×—×—×—

「ただいまー」

俺が風呂から出ると美柑と小町が帰ってくる。

「お、お邪魔します…」

二人に西連寺が申し訳なさそうに挨拶する。

「どうも!お兄ちゃんの方ですか?リト兄の方ですか?」

「お兄ちゃんの方かな？」

小町と西連寺の謎の会話プラス謎の？である。話の内容が意味わかんない。

「ごみいちゃんのくせにやるじゃん!!？小町は感動したよ!!？」

「何が？」

そんな会話を小町と繰り返していると美柑が俺をじと目で見ていたので美柑に話しかけてみる。じと目可愛いな

「へっ!!？」

すると美柑の顔が一気に赤くなる。

「何だ？美柑、熱か？」

そして俺は自分のおでこを美柑のおでこに当てる。そんな熱くは無いなと思っていると美柑は俺の元から離れ、ダツシユで部屋に戻って行く。俺、変なことしたか？

「あちゃー、ごみいちゃん、あの年は色んなことを考える年なのに…」

小町が呆れた顔をし、西連寺がじと目でこちらを見ていた。っていうか西連寺もじと目可愛いな

「ひゃう…」

あれっ？西連寺も顔が赤いなと思ひ、俺は自分のおでこを当てようと思ひ近づこうとするが、家族じゃない子にやったら何か訴えられそう。

西連寺は名残惜しそうな顔をする。

俺は鈍感じゃないから分かるが。

「そうそう、西連寺さん、今日もう雨止まないらしいですよ」

「じゃあ家の傘貸してやれ」

「えっ？お兄ちゃん、家に傘ないよ？」

こやつ、は、謀ったな。

「じゃあ私はどうすれば……」

西連寺が戸惑いの声を出す。小町が容赦なく「泊まっけていってください」と告げる。西連寺は顔を赤くし、リトは小さくガッツポーズ。

そういうわけで西連寺は家に泊まることになった。

—×—×—×—

何か柔らかいものが俺の中にある。しかも両手。

もにゆ、もにゆ

まさか、この音は……。嫌な予感しかない。

「あんっ…ひゃあ…」

「んっ、比企谷くん？つてひゃあああああ」

「す、すまん西連寺」

「比企谷くんならいいよ」

俺はそんな言葉がボソツと聞こえた。俺は鈍感でも無ければ難聴でもない。只々、今の状況を壊したくない。西連寺は嘘をつく子ではない。

俺は人の好意が怖い。何か裏があるのではと裏読みしてしまう。

西連寺はそんな奴ではないからこそ俺なんかのこと好きにならなくて良かったのに…、俺には西連寺に好きになつてもらおう資格なんてものはないだから。

…んで、何で西連寺は俺の布団にいるの？

トラブル4 爆発直前の怒り

今日、ララが学校に来た。部外者ではなく生徒としてだ。リトはすごい動揺していたがね……。知らせとけよリトくらいには……。

まあそんなこんなで学級委員である西連寺がララに学校を案内するらしい。

そして俺がベストプライスで昼飯を食べていた時だった。

リトから電話がかかってくる。

『八幡！春菜ちゃんがさらわれた！場所は体育館倉庫だ！俺は先に向かっているぞ！』

俺はその言葉を聞くと体育館倉庫に向かった。ってか、どの体育館倉庫だ？と思う暇もなく俺は走っていた。

—×—×—×—

「あ！八幡だ！」

俺は走っている途中、ララに呼び止められる。

「お、ララ！丁度いいところに！」

「どうしたの？」

「西連寺がさらわれた。場所は体育館倉庫だ」

「春菜が!?!うん、私も行く」

「走…」

そう言う間も無くララに手も掴まれ音速を超えるかと思うほどのスピードで体育館倉庫に向かっていった。

—X—X—X—

「ララ、ここだ!」

「わかった!」

俺たちは躊躇いもなく中に入る。中には宇宙人と服を脱がされたあられもない西連寺の姿があった。

「リトロー♡、やっと見つけたー!!?こんな所にかくれちゃってもーっ♡」

いきなりリトに抱きついたララにリトが「げ」と声を漏らす。

「あれ?あいつギ・ブリー?まさかあいつが春菜を…」

「ララ…、お前はオレのものだ」

ギ・ブリーと言われた宇宙人はララに向かって話しかける。

「ベーーーーっだ。それより早く春菜をはなして！そのコは私の大事なトモダチなんだから!!？」

「だまれ…ララ…。」

「な！なんだア!!？」

ギ・ブリーの体が見るみる大きくなっていく。

「オレを拒むなら!!？全員地獄を見る事になるぞ!!？このギ・ブリー様の真の姿でなアア!!？」

「なあララ、リト…。こいつ俺に任せてくれないか？」

俺は自分でも信じられないほど今、怒っているのだろう。俺の少ししかない知り合いを傷つけて、俺のことを好きになってくれた子を傷つけて…

許せるはずがなかった。

この宇宙人は俺の記憶の中だと確かクソ弱いはずだ。俺の威圧に押されたのかララとリトはコクンと頷き、ギ・ブリーは驚いた顔をしている。

「ギ・ブリー、俺は知り合いが傷つくのを極力見たくないんだ…。お前のせいで西連寺が傷ついた。これだけは変わらないよな？」

「ひっ!!?」

ビビるギ・ブリーを傍目に俺は一步一步近づいていく。

「てめえの実力じゃありトにも勝てないよな?」

「く、来るな!!?」

倒れ込んだギ・ブリーは後ろへ下がるも壁にぶつかってしまふ。

「じゃあ、最後に一つだ」

俺は少しずつギ・ブリーに近づく。

「…もう地球に来んな。クソ宇宙人が」

その言葉と同時にギ・ブリーの頬に強烈な一発をぶちかます。ギ・ブリーは吹っ飛び
気絶してしまった。

「は、八幡?」

「ん?どうしたリト」

「…こ、怖かったんだけど…」

「誰が?」

「お前がだよ…。」

「そうか？」と俺は心の中で呟く。

いつの間にかギ・ブリーは消えていた。ララの持っていた道具でどつかに飛ばしたらしい。ようやくして西連寺の縄をほどき、リトと俺は教室に帰っていった。

無事に西連寺は六時間目の授業に参加したのであった。

—×—×—×—

「あ、あの！」

帰ろうとしていた俺を西連寺が引き留める。

「今日は助けてくれて、ありがとう！比企谷くん」

「別に、大したことはしてないから」

「ううん、ララさんが教えてくれたよ」

ララの奴…余計な事を…。

「あのね…ちよつと言いくいんだけど…」

西連寺がモジモジし始める。

「今回のお礼を兼ねて私と今度出掛けてください！」

「はい？」

「えーとっ、今度お礼がしたくて…。」

「はあ…わかったよ…。」

「ほんとっ!？」

「あ、ああ」

俺は必死な西連寺の返事に応える。どうせ小町にチクられても面倒だしな…。

「今度の日曜日でいい？」

「あ、ああ大丈夫だが…」

「それで決定ね！後でメールするから！」

そういう西連寺が走り去っていった。俺のアドレス西連寺に教えたっけ？と思ったがまあどうとでもなるよなと思いい家に帰った。

家に帰ると西連寺からのメールが入っていた。誰が教えたんだよ…。多分小町…：…いや、確実に小町だが。

このことが皆に知られたらしく、リトから羨ましそうな目線。学校に行くとき「何であいつが…」なんて声も聞こえ、靱岡からは「やるねえ」と言われた挙句美柑が俺に怒

り気味だった。

—×—×—×—

そしてデート当日

小町に着せ替えをさせられ待ち合わせ場所に向かう。リトには悪い気もしながらも向かった。

トラブル5 初めてのデート

西連寺からのお礼と言う名のデート当日の日。俺は小町に「女の子を待たせちゃダメだよ!!?」と言われ、待ち合わせ15分前に待ち合わせ場所にいた。

「比企谷くん！待った?」

そう言いながら俺の方に向かってくる少女——西連寺春菜は手を振りながら向かって来ていた。ふええ。周りの人が西連寺と俺を見てるよお。

「待ってないぞ。まず約束の時間10分前だしな」

俺はそう答えると西連寺が最初に行きたがっていた場所に足を運ばせた。

—×—×—×—

「……………」

「な、なあ。西連寺……………」

「ど、どうしたの?比企谷くん?」

「や、やっぱり何でもない…」

いや、どうしたのじゃないでしょ。と言いたいところなのだがこの事は俺が原因でもあるのでなんも言えない状況になってしまっている。

何で俺が西連寺と手を繋いでんだよお!!? しかも、少し顔を俯いて赤らめてるし!!
?

別に嫌というわけではないのだが、こういう美少女と一緒に手を組んでいると周りからの目が痛い上に俺のメンタルがボロボロに削られていく。ただでさえぼっちは視線に敏感なんだぞ。

集合してからいろいろな店を周り、こないだのお礼という事でネックレスを買ってくれた。値段は何と……1200円!

高いのじゃなくていいと言ったはずなんだが、「お礼だから!」と言われ押し切られてしまった。……俺弱っ。

まあ、多少心が痛んだ俺は何かやってほしいことを言ってくれと言ったらこの有様で

ある。流石にいうとは思わなかったが今俺たちが歩いている商店街が結構混んでいるからはぐれないようにだろう。うん。絶対そうだ。

「あ、比企谷くん。ここ入っていい?」

顔を赤くした西連寺があるお店に指を指す。西連寺が指を指した場所は――

ランジエリーショップ
――下着屋だった。

………やばい。これはやばい。男の俺が下着屋こんなどこに入ったら不審者扱いされる。しかも目が腐つてると言う付録付きだ。

「? ひ、比企谷くん?」

「………あ、ああ。わかった………」

俺は流されるがままに、西連寺に連れていかれた。………本当にどうしよ?

――×――×――×――

「ひ、比企谷くん。これとかどうかかな? / /」

どうしてこうなった!? (本日2回目)

まあ、西連寺が下着を選ばなかった所は良しとするが、流石にランジェリーショップ下着屋に男を連れて行くのはどうかと思う。この店を見渡したら男俺一人だし。店員さんにも変な目で見られてるし。

今西連寺が手にしてる服はワンピースだ。白をメインとした西連寺に相応しい美しい服だ………はっ！俺は何を…。

「い、いいんじゃないか？」

「ほんとっ？！」

「お、おお」

この娘ちよつとキャラ変わりすぎじゃないか？ こんな積極的だったけか…。

「じゃあ。ちよつと試着してきてみるね」

「了解。じゃあここで待ってるわ」

西連寺が入った試着室の隣の壁に俺は寄りかかる。………そういえば今日リト達がララに彩南町を案内するって言ってた気がするな……。もしかしたら会うかも……。そんなことを考えている時だった。

この店に、四人組の男女が飛び込んできて、ピンク髪の少女一人だけが、西連寺の隣の試着室に入った。

………ん？ 何か見覚えがあるんだけど………。

「……あれ？ 八幡じゃないか？」

俺に話掛けてきたその少年は、ピンク髪の少女が入っていった試着室の前に立っている。

「……うす。リト」

—— 結城リト。俺の幼馴染がそこにいた。

なんてシリアス口調に言ったが、特に大したことじゃない。

「は、八幡。なんでここに……ま、まさか……」

「おい。いや、違いから。俺がどんなに怪しくたってそんなことはしないから」

「そ、それなら良かった……」

「リト……！ これとかどうかな？」

試着室から出てきた少女、ララは下着姿で立っていた。

それと同時に着替えが終わった西連寺が試着室のカーテンから顔を覗かせる。

「この声……ララさん？」

「あ！ 春菜だー!!？」

……突然の西連寺の登場に、リトの口は大きく開き、驚いた顔をしていた。

—×—×—×—

「わあー！ きれーい!!？」

「いろんなおサカナがいるねー！」

なんだかんだで俺と西連寺、リトとララ、美柑、小町が合流し、一緒に彩南水族館に行くことになった。ってか、西連寺とこの前一回会っただけなのにもう美柑と小町はすごい仲良くなってるし。コミュ力はんパネエ。

そしてララは水族館が初めてなのかは知らんがすごい喜んでるようだった。

「当たり前だろ。水族館なんだから」

ララの言葉にリトが的確に突っ込む。

「あ！ あれ すごーい♫」

「ララさん。あんまりはしゃぐと迷子になるよー」

ララは美柑の言う通り、水族館を走り回っていた。…どんだけ嬉しいんだよ。

すると、小町が俺の腕を肘でつつく。

「お兄ちゃん。春菜さんとのデート邪魔しちゃってごめんね」

ボソボソと俺の耳に呟かれた小町の言葉は、少し楽しそうだった。

「おい。小町。にやにやしてんじやねえ」

「べつつにー！にやにやしてなんかないよー」

「嘘つけ」

俺たちがおんなな会話を繰り広げる中、リトが西連寺に「デート邪魔してゴメンね」的なことを言っている。バ、バツカ。これデートじゃねえし。西連寺がお礼って言ったし。

「んじや、小町はララさんのこと追いかけるからねー」

「あー！ 私も行く」

「じや、じやあ俺もー」

小町がララを追ったのを皮切りに、残りの二人もいなくなる。

……これ絶対測ってやってんだろ。あいつら…。

こうして、俺は再び西連寺と二人つきりになった。

「ひ、比企谷くん。一緒に回ろっか？」

「あ、ああ」

なんで、俺がこんなラブコメな雰囲気を漂わせているのか。

さっきまでは二人だったのに、いきなり二人つきりにもう一度された俺…いや、俺たちは、少しだけ、緊張していた。

トラブル6 止まらないドキドキ

「ひ、比企谷くん。一緒に回ろっか？」

「あ、ああ」

場所は水族館。俺は今、クラスメイトである西連寺春菜と一緒にいた。

最初はお礼という名目で西連寺が俺を誘い、商店街をブラブラしていたのだが、途中で、ララに彩南町を案内しているリト、小町、美柑と会ったのだ。

そして、6人で水族館に行くことになったのだが……

ララが初めての水族館ではしやぎ始めてどっかにいってしまい、それを追いかける形で、小町、美柑、そしてあのリトまでもがララの方に行ってしまった。

非常に気まずい。

そりゃあさつきまでは二人で一緒にいたが、こう唐突にされると先程までとは違う緊張感が湧き出てくる。

西連寺の表情も心なしか少し固まり気味な気がする。

「……さ、西連寺。すまん。変なのに付き合ってもらっちゃって」

「だ、大丈夫だよ。ララさんがああなのは前に学校案内した時に知ってるしね」

「じゃあ俺らもあいつらの後を追いかけるとしますか」

俺はそう言い、ゆっくりと歩き出した。その直後、俺の服の袖が引つ張られた。

俺が後ろを振り返ると、少しどぎまぎした表情の西連寺が俺の袖を引つ張っていた。

「ど、どうした？ 西連寺？」

「……ひ、比企谷くんに伝えたいことがあるの…」

西連寺の頬がほんのり赤く染まる。

「…わ、私は、……中学の頃から……ひ、比企谷くんのことが……す——」

西連寺の言葉が途切れる。そして、俺の後ろをバサバサと鳥のようなものが通った。

「うおっ！」

周りを見ると、本来飛ぶはずのない鳥類の動物。ペンギンが飛んでいた。

何匹ものペンギンは「クエー——ッ」「クエー——ッ」と泣きながらバサバサと羽の音

を立てて飛んでいた。

周りにいた人たちからはどよめきの声上がる。

すると、いきなり呑気な声が聞こえてくる。

「あー！ 八幡に春菜ー!!? どう? すげいでしょ? これー！」

「……やっぱお前か……」

俺はさっとため息を吐く。西連寺の顔なんて真っ白で固まっちゃってるし。

「で、何したんだ？」

「いやー。あの子達の動きが鈍かったからコレあげてみたの！」

すると、ララはどこからか錠剤を取り出した。

「じゃじゃーん!!? 一粒で元氣1000倍♡

デビルーク戦士の秘薬!!? 『バーサーカーDX』!!?」

「おかげであんな元氣に!!?」

「おいララ。この状況を一体どうするつもりだ？」

「それに関しては安心だよ!!? 持続時間はたったの20分だけだからね!!?」

「十分長いじゃな……」

暴走するペンギンは、放心状態の西連寺の方は突進を始めていた。

「春菜! 危ない!!?」

咄嗟に出た言葉は、苗字ではなく名前の方だった。それほど余裕がなかったのだらう。

西連寺の名前を呼んでもまだ気づかない。俺はいつの間にか、西連寺の方へ走り、向かっていった。

「…ひゃー!」

西連寺に向かって走っていた俺は、ペンギンから守ることはできたが勢いを止められずに、西連寺を床ドンしたような形になっていた。

「……………」

「」

両者数秒の沈黙。

「……………」

そして同時に赤くなる頬。

「す、すまん春菜！ ……じゃなくて西連寺」

「う、ううん!!？」 あ、ありがとう！ 比企谷くん」

すると、西連寺が何かに気づいたらしく……、

「…あ、あれ？ 今比企谷くんわたしのこと春菜って言わなかった？」

「うっ。すまん。咄嗟に出てきて……嫌な思いさせたんなら謝るわ」

「私はむしろ嬉しい……かな？」

にっこりと、首を傾げ、頬が赤い西連寺の笑顔に、俺は不覚にもドキツとしてしまった。

「じゃ、じゃあこれからは春菜……で、いいか？」

「うん。それなら私は八幡くんって呼んでいい？」

「ああ。全然いいぞ」

「……………」

いや、までこれ。会話が続かないとくそ恥ずかしいぞ。何かリトには申し訳ないような気持ちが出てくる。

昔の俺なら、とつくに西連寺……春菜との関係を自ら断ち切っていたかもしれない。ただ俺は変わってしまった。今この時、この瞬間が最高に心地よく感じてしまう。できるだけこの時を長く、この瞬間を長く。

「おい！ ララ！ これは一体どういう！」

ララはいつの間にか合流していたリトと話していた。

。。
。

春菜の部屋

〇
〇
〇

今日のことを思い出すたびに、何度もフリーズを繰り返していた。
この日、西連寺はなかなか寝付けなかったという……。

トラブル7 赤髪のおさげの少女

これは、約1年前の話である。

夏に入ったか入っていないような時期、生暖かい風が吹く地球の日本。

俺はその時、ある星にいた。名もなき星。

自分の宇宙船を使い、特に理由もなく、只々、気のいくままに、その星に着陸していた。

辺り一帯は砂。とにかく砂で他には何にもなかった。

だからこそ、彼女の姿が目深く焼きついた。

赤髪のおさげが特徴的で、露出が多い暗い服を着ていた。

「……………誰？」

その少女は俺に問いかける。暗く、死んだ目で。

「…通りすがりの宇宙人。だな…」

「あなたは何でここに？」

その少女が纏っているオーラは、殺意そのものだった。

「…別に…ただふらつと立ち寄っただけだ…」

「そう…」

「お前こそ、何でこんなところに？」

「…私は…人を待っているの」

「なあ…」

「何？」

「殺意をそんなに出すなよ。お前が殺るべき相手がいる時にそんな殺意出してつと警戒されまくりだぞ」

「…生憎、私はまだ人を殺したことがないの。マスターからも言われてるし」

少女の口からマスターという言葉が出てくる。

彼女はきつと、マスターとやらのことを慕っているのか、連れていかれているのかだろう。

直後だった。

地面がズドツ!!? と割れ始めたのは。
急いで俺と赤髪のおさげの少女は地面を見る。

そこには、タコ型の巨大生物が20匹近く出てきた。

「……この数は……!?」

「……何でこんなに……?」

約20匹は流石に多い。この少女が協力してくれるかはわからないため、どうするかを迷っていたところ……

「…名前教えて」

少女の問いに俺は答える。

「比企谷八幡。お前は？」

「……黒咲メア」

「黒咲。少し頼みごとがあるんだが」

「私もちようどそう思ってたところ…」

そして、俺たちは同時にいう。

「このタコ（さん）を倒すのを手伝え（手伝って）!!？」

俺たちは無言で走り出す。

黒咲は髪を剣に変形させる。珍しい能力。否、見たことがない能力。髪を変形させるなんてどんな能力なんだろうと思いつつも、俺も能力を発動する。

俺の能力は、*“腐らせる”*。

その名の通り腐らせるのだが、流石に生き物を腐らせるのは抵抗があるため、いつも

の使い方はしない。

俺は、腐りオーラを纏うことにより、常人にはありえない身体能力を発揮することができる。

そして、俺は腐りオーラで身体能力をあげ、タコを蹴る。その巨大タコは、俺の軽い蹴りでも飛んで行った。

黒咲も剣でタコの足を切っている。

タコの動きはそこまで難しくない。

一本づつの攻撃しかこないため、ゆっくり対処すれば難なく倒せる。

俺が5匹を倒した時だった。

「きゃあつ!!?」

そんな声が聞こえた。黒咲の声だった。

彼女の元には、1匹の超巨大タコ。巨大タコの何倍の大きさだった。

彼女の剣はタコの足に通らなくなっていた。

彼女は捕まり、口をふさがれていた。

「…黒咲!!?」

「…ッ! ん〜!」

俺はタコの目を蹴る。

だが、黒咲のことは離さない。

反射的に離すと思ったが、そう簡単にはいかないか。

「…待ってる黒咲!!?」

「ッ!!?　ッ」

息ができていない。そろそろ蹴りをつけないと、黒咲が死ぬ。

その前に決着をつけてしまわなければ。

「っふー」

俺は腐りの力で作った剣でタコの足を切る。

足を腐らせて切る。黒咲の剣でも通らなかつた硬い皮膚さえ腐らせてしまえば関係ない。

黒咲が足から落ちる。俺はもちろん黒咲を受け止める。

そして、黒咲は、今でも意識を落としそうな顔で声を絞りだす。

「……あ、ありがと……う」

「黒咲。安心して寝てろ。すぐ終わらせる」

そして、俺は超巨大タコに向き合う。

「さあ…タコ……」

自分でもわかるくらい低い声で

「おしおきの時間だ」

そう言った。

。。。

【KUROSAKI MEA SIDE】

私は瞼を上にも上げる。

「……………ん」

「ん？ 起きたか」

「タコは……………？」

「もういないぞ」

「そう……………」

「俺はそろそろ行くがお前は どうする？」

「私は人を待ってるから」

「そうか……」

「貴方、何歳？」

「14歳……」

私よりも年上だ。

「じゃあ俺は行くわ」

「ま、待って！」

今から私がい言葉は、柄じゃないと思う。さつき伝えた言葉。

でも、まだ伝えきれていない言葉。

「えっとーあの」

頬が赤くなる。ついモジモジしてしまう。

「あ、ありがとう」

目が腐っていて、素っ気なくて、強くて、優しい先輩。

心がぎゅつと締め付けられた。彼の顔を見るたびに、声を聞きたびに、胸が苦しくなる。

このモヤがかかったむず痒い気持ちは、今の私にはわからない。

「おう。気にすんな」

「じゃ、じゃあその前にいいですか？」

いきなり敬語にするのは違和感があるだろうか。

「今は、どの星に住んでますか？」

「地球の日本ってところだ」

地球の日本。そこに先輩は住んでいるらしい。

「じゃあな。黒咲。また会えたらそんな時はよろしくな」

先輩は手を振り何処かへ向かう。私は、先輩の背中を見ながら、静かに思う。

（絶対にまた会いますからね♪ 先輩♪）

楽しかった。心が跳ねていた。

「おい！ メア行くぞー」

そんな声が後ろから聞こえる。

「マスター！ はい！すぐ行きます！」

私はマスターの元へ走りだす。今はただ、先輩のことだけを想って。

トラブル8 臨海学校へ

臨海学校。それは、海やらなんやらするイベントである。

まあ近々あるので準備をしている時だった。

「八兄、臨海学校なくなるかもよ？」

俺の部屋に入ってきた美柑が唐突に、そして残酷に告げた。べ、別に楽しみだったわけじゃないんだからねっ！

うん。やめよう。

—×—×—×—

美柑に残酷に真実を突きつけられた俺、そして、リトとララ、おまけに美柑と小町はニュース番組を見ていた。

〔引き続き台風情報です〕

〔大型で強い勢力の台風○○号は、速度を速めながら北上しており……〕

〔台風!??!〕

「しかも今夜から直撃だつてサ」

驚いたリトの声に美柑が冷静に言葉を返す。

「臨海学校終わったな」

「えー！　そんなのやだよー!!?　せつかく色々準備してたのに!!?」

俺の言葉にララはショックの声を上げる。

「しよーがねーだろ。台風来るんじゃ泳げもしねーし」

「……………私が何とかする!!?」

少し悩んだ後にララがそう言う。

「ペケ、行くよ!」

「はい。ララさま」

そう言いララはリトの制止を聞かず空へ翔び立つ。ていうかリト巻き込まれてんじゃない……。

—×—×—×—

「んじゃ、俺臨海学校の準備してくるわ」

「え?　八兄台風来るのに?」

「ララならどうにかするだろ」

「小町空気なんですけど……」

「どんまい小町」

「うるさいごみいちゃん」

—×—×—×—

1時間後

俺は、臨海学校の準備を終えるとソファアに座っている美柑と、先程の雨で濡れたせいで風呂呂に入っていたリトとニュースを見る。

「えー、大変めずらしい現象です！ 台風は突如大きくカーブを描き日本から遠ざかりました!!? 私も長年気象予報士をやっていますがこんなことは初めてで……」

「何したの？ ララさん」

「うー、声……つつーか、気合で解決つつーか……、さすがは宇宙の帝王の娘……」

「ほら、言つたる？ 美柑」

「……何かムカつく……」

俺がドヤ顔で美柑に言うと、ムスっとした顔でこちらを睨みつけてきた。や、やめて
！ そんな見られると八幡おかしくなっちゃう！

。。
。

何はともあれこうして、ララのおかげで臨海学校は無事行われることになった。

「さー諸君!!? いざ出発——————!!?」

「お——————!!?」

はたして臨海学校ではどんなトラブルがリトに待ち受けているのやら。

つづく!

おまけ

登場人物紹介

比企谷 八幡

本作の主人公。小町の兄でリトと美柑とは家族同然の関係。昔小町と日本に降りてきたから結城家に拾われ養子となる。クサリメ星人の生き残りで、クサリメ星人の能力

を十分に扱うことができる。中学の頃リトが花壇荒らしの濡れ衣を自ら被るなど自分を大切に思っていない節がある。西蓮寺からの好意には気づいている。とある理由で、ララの父親を憎んでいる。

結城 梨斗

八幡の親友であり家族。西蓮寺に想いを寄せるが、ある事情によりララと婚約関係になつてしまう。西蓮寺が好きな八幡に少し嫉妬していると同時に八幡になら、と思つている。

ララ・サタリン・デビルーク

とある事情で地球に降りてきた宇宙の帝王の娘。リトと婚約関係にある。物を造るのが得意で、すごい物を造るが、必ず不具合が起きる。戦闘能力は高く、なんでもこなしてしまう破天荒お嬢様。

西蓮寺 春菜

八幡やリト、ララのクラスメイトで学級委員長。きつちりとした性格で、男子からの人気がある。中学時代にあつたことで、八幡に好意を寄せる。

内気な性格だが、八幡へは積極的になる。

トラブル9 肝だめしのジnkクス

「彩南高校のみなさーん。遠い所よくぞいらつしやいましたくくく!!?」

俺たち彩南生は臨海学校の宿泊先の旅館に着いた。

「おおっ！ 美人女将だ」
おかみ

近くにいた猿山が言う。すると――

「高美ちやーん♡ 会いたかったよオーオー♡♡」

いきなり飛び込んできた校長に女将がパンチをお見舞いする。どこでも校長は変わらぬいな…。

「こちらが大広間でエーす」

俺たちは女将に案内され大広間に向かった。

—×—×—×—

《えー、今日から三日間の臨海学校!!? みんな自然と大いに触れあって楽しい思い出を作ってください!!?》

福寿の間と呼ばれる大広間で、校長の声が響く。

《というワケで今夜はさつそく恒例の肝試し大会があります!!? お楽しみに〜》
 《!!?》

「ねエー高美ちゃん♡」

「またも女将に飛び込み殴られる校長。ていうかこのおっさん女将に会うためだけに臨海学校の宿泊先の旅館をここにしているんじゃ……。」

—X—X—X—

「んじゃ、さつそくフロ行くか」

「そーだな」

「そう言ったのは猿山とリト。俺は、リト、猿山、他の二人と同じ班である。」

「女子も今頃入ってるんだろぅな〜〜〜」

「ここはやはり男としてやつとくべきかね?」

「お前ら…何を…?!?」

猿山と男子1人の会話にリトが反応する。

“決まってるんだろ ノ・ゾ・キだよ”

その二人の顔から言わなくても想像がついた。

「よし行くぞ!!?」

「お、おい! 待てよ、何でオレまで!!?」

「ちよつと、待て、何で俺の腕も掴む。おい。猿山」

—X—X—X—

「お…おい。やっぱやめよーぜのぞきなんて」

「バカ ここまで来て何言ってるんだ」

「リトだってホントは見たいだろ? 西連寺のハダカ!」

「な!!? 何言ってるん…」

猿山たちにかわかれたリトがつい大声を出す。

「静かにしろバカ」

すると、女子風呂の方から声が聞こえてくる。

「でもさ——けっこうバカにもできないかもよ。

ンクス」

知ってる? この肝だめしのジ

「ジnkクス?」

「この臨海学校の肝だめしで最後までたどり着けた勇氣あるペアはね、必ずその後結ばれてカップルになっちゃうんだって!!?」

「えー? ウソ~~~~」

「マジだつて! 去年も一昨年もこれでカップル誕生したらしいよ!」

と、そんな会話が聞こえてくる。へえ、そんなジnkクスがあんのか。まあ俺には関係ないけどな。今リトは春菜ちゃんと!とか思つてそう。

まあ、いいや俺はふつうに風呂に入ろう。ノゾキばれても面倒だしな。リト、強く生きろよ。

《さて!!?》では今から肝だめしのペアをくじ引きで決めまーす! 各クラス男女それぞれでくじを引き同じ番号同士がペアでーす!!?》

最後まで辿りつけければカップルか…。まあ俺には関係ないな、そんな相手もないし。

そして、俺は自分の番になりくじを引く。番号は5番だった。できれば知ってる女子の方がいいけど俺と関わりのある女子なんてほとんどいないからな。

「は、八幡くんも5番?」

「お、おう。春菜もか?」

「う、うん。私たちペアだね」

「ああ、そうだな」

……あかん。会話が續かねえ。知らない女子じゃなかったのが唯一の救いだけど、知ってる女子でも結局気まずいのかよ…。

「では、肝だめし大会スタート!!?」

俺らがなんやかんやしてるうちに、校長の掛け声とともに肝だめし大会が始まった。

—X—X—X—

「お、俺たちの番か」

「う、うん。そうだね」

ついに俺たちの番が来て、出発する。

「は、八幡くんはこういうの大丈夫?」

「まあ、驚いたりはすると思うけど幽霊とか信じてないから大丈夫な方だとは思う。春菜はっ。」

「私はオバケとかが怖いから、ほんとには肝だめしなんてしたくなかったんだけどね…」

「そ、そうだったのか?」

「うん。だから…、こ、怖いから手…繋いでもいい?」

「…ガチか？」

「う、うん」

そう言い春菜は涙目+上目遣いをしてくる。そのコンボはずるいだろ…。俺じゃなかったらイチコロだぞ…。

「わ、わかった…」

「それにしても真っ暗だね」

「この道を500M^{メートル}進んだ神社の境内けいだいがゴールらしい」

そんな話をしてしていると俺たちより先に行った奴らが慌ててこちらに向かってスタート地点まで走っている。

少し、不思議がりながら俺たちは進むと、いきなり草むらから「うらめしやく」といきなり出てくる。

「うおっ」

「きゃ—————!!?!?!?!」

すると、いきなり春菜は叫びながら走り去ってしまった。

「いや、ほんともうちよつとちやんと手を繋げばよかったか…」

そう言いながら俺は、走り出す。きつと春菜にとつてここは地獄のようなところなのだろう。早く見つけてゴールをしてしまわないと……

……いや、別に春菜と恋人になりたいわけじゃないからね？ そのためにゴールするわけじゃないからね？ 流石に俺はペアを見捨ててゴール地点に行くほど外道なことはない。増してやその娘がオバケが嫌いだと事前に聞いていたわけだし、見捨てるわけにはいかないだろう。

俺が走っている途中にもオバケたちが脅かしてきているが、今はそんなのに構っている暇はない。すまん、オバケ役の人たち。

すると、草むらからガサゴソと音がしたので、そこに向かう。

そこにいたのは、涙が目元から溢れている春菜の姿だった。

「よかった。ここにいたのか…」

そう近づくといきなり春菜が俺に抱きついてくる。

「お、おい。春菜。大丈夫だから、な？」

なんで俺は小さい子に話しかける時みたいな口調になったんだよ…。

「怖いよう…。無理なおオバケ…」

「ほら、泣き止めて、俺がいるから、な？」

「ほんとうに？」

「ああ。本当だから。ほら、ゴールに向かうぞ」

「うん」

すると春菜は俺の手をぎゅつと強く握りしめる。痛い…。

この様子だとオバケが出ることにこうなる可能性が高い。どうしたもんか…と、思っている矢先にオバケが草むらから出てきた。

「うらめし「あゝ」ひつ、す、すみません…」

俺がギロつとオバケ役の人を睨むと逆にオバケ役の人が怯えて謝ってきた。ええーこの眼がこんなところで役立つちゃうのかよ…。なんか悲しいわ…。

「は、八幡くん…もうそろそろ着く?」

「あ、ああ。多分な」

結局その後も睨んだらオバケの方が怯んでしまい、何事もなくゴールに着く。

「ゴールおめでとー!!!? 今年の肝だめし大会の始めての達成者は君たちだ!!!」

「あ、忘れてた」

「あ、あれ、これって確かゴールできたら恋人になるってやつだったっけ?」

「…あ」

そのことを思い出し、春菜は顔を赤くする。多分俺も赤くなってるだろう。いや、ほんとこんなジnkクスいらから…。

そして、俺たちが少し気まぎらなくなった頃に、大きな爆発音とともにリトとララのペ
アが突っ込んでくる。

またララの発明品が失敗したなと思った俺だった。……まじで気まぎらかった俺と
春菜の元に来てくれたのは助かった。……リトも大変だな。